

障害福祉サービスを選択する要因に関する一考察

～介護職選択に影響を与えるターニングポイント毎における分析より～

A Study on Factors for Selecting Disability Welfare Services

— From the Analysis of Each Turning Point that Influences Care Worker Selection —

馬 淵 敦 士
Mabuchi, Atsushi

要旨

障害福祉サービス（重度訪問介護事業者）に従事する者に対して、なぜ障害福祉サービスに従事することになったかをオンラインで調査した結果、介護職以外から転職してきた者には、①転職してきた事業者が障害福祉サービスを行っていた。②福祉の仕事に魅力を感じて転職してきた。③学生時代のボランティア活動が契機となり転職してきた者が存在することがわかり、学校を卒業して障害福祉サービスに従事した者には、①身内が介護を必要としていた。②学生時代のボランティア活動が契機となって障害福祉サービスに従事した者が存在することがわかった。

キーワード：人材育成 人材確保 人材定着 障害福祉サービス

1. はじめに

日本が超高齢社会となり10年が過ぎた。今後も高齢化率が高くなることが予測されており、2025年には約30%、2060年には約40%に達すると見込まれている¹⁾。それに伴い、介護が必要な高齢者も増加していくとされており、当然ながら介護従事者も必要となってくる。

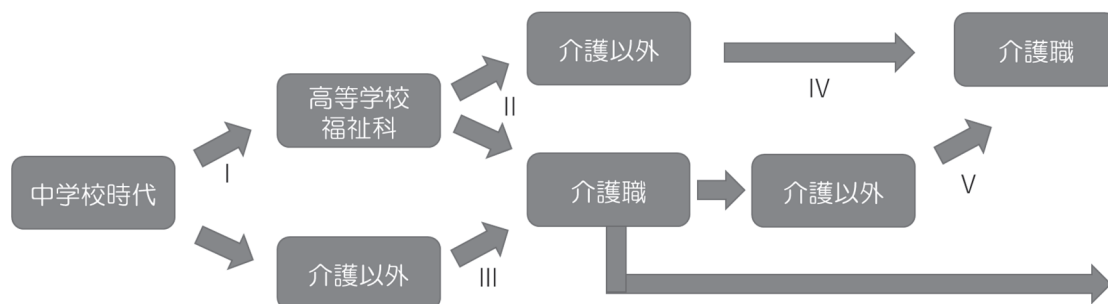


図1 介護職選択に影響を与えるターニングポイント（筆者作成）

介護以外：進学・休職（育児や介護休業含む）・介護職以外の職業

さて、高齢者が増加することは周知の事実であり、消費税増税分を社会保障に充当するという国策は公にも理解されていると思われるが、介護従事者にとって、この施策が有効になっているかどうかは現在のところわかっていない。高齢者が増加し、介護従事者が不足する、その事実があるにもかかわらず、介護従事者は正比例的に増加しているという話は一向に耳にしない。また、高齢者介護にばかり焦点が当たってしまい、障害者介護の人材不足についての先行研究は、管見の限りではあるが存在しない。障害者分野に焦点が当たらない理由として、障害者に比して高齢者の人口が圧倒的に多いことと、誰もが避けて通れない「高齢」という部分に焦点を当てざるを得ないからであると考えている。

筆者は現在、障害福祉サービス従事者の「人材確保・人材定着・人材育成」について、どのようにすれば介護人材が育成されるのか、定着するのかという研究を進めているところであり、図1のように、障害福祉サービスを選択する中では多くのターニングポイントがあると考えている。例えば、障害福祉サービス従事者を選択する時には何らかのきっかけが生じ、当然それは人によって相違するわけであるが、それを実際に障害福祉サービス従事者に聴取し、分析することによって、障害福祉サービス従事者という職業を選択する要因の一部分を理解できると思われる。さらにそこから障害福祉サービスという職業を訴求することができれば、障害福祉サービス従事者が増加する要因をつかめるのではないかと考えた。

しかし、すべての者が中学校・高等学校・さらには大学や専門学校を卒業後すぐに障害福祉サービス従事者になるわけではない。図1のように、人生における職業選択を迫られるターニングポイントがいくつか存在し、その都度で選択肢は変化しているのではないかと考える。すなわち、ターニングポイント別に障害福祉サービス従事者を選択した要因を聴取し、分析することで、それに適するアプローチが見いだされるのか、若しくはいかなるターニングポイントにも共通する「何か」が存在するのかが見いだされるのではないだろうか。

本研究においては、現に従事している者を対象として、「障害福祉サービス従事者を選択したきっかけ」を聴取するとともに、それをターニングポイント別に分類し、分析を行う。それぞれのターニングポイントによって違いが生じるのか否か、違いが生じないのであれば、障害福祉サービスを選択するきっかけが何かを明らかにしていく。

2. 問題の所在および目的

(1) 障害福祉サービス従事者が置かれている現状

現在我が国においては、超高齢社会に向けて介護人材不足が叫ばれているが、障害福祉サービス従事者の人材不足については大きく取り上げられていない。介護労働安定センターが毎年行っている調査（2019）は、介護保険サービスを提供している事業者施設が対象であり、障害福祉サービスは対象外とされている。同調査においては、介護人材の不足

感²⁾については 67. 2%であり、年々増加傾向にある。同様に、障害福祉サービスにおいても筆者の実感ではあるが不足感は同様に存在していると感じる。それに関する公的調査は未だ実施されていないのが現状である。全国的に障害福祉サービス従事者の人材不足を明らかにすることは、別の研究で行う必要があると考えている。

(2) 職業選択におけるターニングポイント

図 1 では、介護職を選択する際のターニングポイントを I～V に分類して示している。ターニングポイント I、すなわち中学生が高等学校福祉科を選択するきっかけについては中学校での福祉体験学習が関係しているということが明らかとなった。(馬淵 2018)。よって、今回のターニングポイントは、II 「高等学校福祉科を卒業した者が介護職を選択するきっかけ」 III IV 「介護職以外の者が介護職に転職するきっかけ」 V 「一旦介護職を辞めた者が再度介護職を選択するきっかけ」について明らかにしていきたいと考える。具体的には、「卒業後、すぐ障害福祉サービスに従事（以下「卒業後就職」とする）」した者、「育児・介護休業からの再就職（以下「再就職」とする。）」した者、「介護以外の業界から転職（以下「介護以外転職」とする。）」した者、そして「高齢者介護から転職（以下「高齢者介護転職とする）」した者に分類する。

(3) 本研究の目的

本研究では、障害福祉サービスの人材不足解消のために、現に障害福祉サービスに従事している者に対して、その職を選択した理由（きっかけ）を聴取し、分析することによって障害福祉サービスを選択する具体的なきっかけを明らかにし、障害福祉サービス従事者の増加に繋がるキーワードを抽出することを目的とする。

3. 方法

(1) 調査対象者

現に障害福祉サービス（重度訪問介護事業所）に従事している者

(2) 調査期間

2018 年 10 月 10 日～2019 年 6 月 30 日

(3) 調査人数

有効回答者数 272 人（オンライン調査につき配布した人数は測定できないため、有効回答率は算出不可）

(4) 調査方法

Google Form を利用してオンラインによる質問紙調査を行った。

(5) 調査における留意点

Google Form は Google 社が提供している「表計算ワークシートと連動する形式でのアンケートフォーム を作成できる機能」(2010 神谷) であり、倉田ら (2010) が日本の大学における研究データの分析調査としてオンライン調査を利用している。オンライン調査についてはデメリットとして「強い努力の最小限化」³⁾ によるデータの質の低下が示唆されており (三浦ら 2016)、分析に細心の注意を払う必要があるが、ネット環境を利用することで、最大のメリットである調査対象の多様化と迅速性を求めることができる。

本研究では、全国の障害福祉サービス事業者を対象としているため、広範囲で情報収集をする目的として Google Form を使用し、調査を行うこととした。調査内容に自由記述欄を多く設けることで、「強い努力の最小限化」を極力排除し、質の高いデータ収集を心がけることとする。

(6) 研究倫理

四天王寺大学研究倫理審査委員会に承認を受けて実施している。(IBU29 倫第 10 号)

(7) 調査内容

1. 属性

性別・年齢・職位・雇用形態・取得資格・従事年数・所有資格・最終学歴

2. 中学校における福祉体験学習の有無

3. 設問 2. においてあると回答した場合、どのような福祉体験を行ったか (自由記述回答)

4. 障害福祉サービスに従事する前の状況

再就職・高齢者介護転職・介護以外転職・卒業後就職・その他より選択。

5. 障害福祉サービス従事者となったきっかけ (自由記述回答)

6. 中学校における福祉体験学習と障害福祉サービス従事者選択の関連性

7. 障害者介護の人材不足感

8. 介護人材不足の中での不足解消について (自由記述回答)

9. 中学校における福祉体験学習について (自由記述回答)

4. 結果

(1) 基本属性

基本属性を表1に示す。「性別」は、男性が149人（54.8%）、女性が121人（44.5%）であった。なお、回答しない者は2人（0.7%）であった。

「年代」で最も多いのが40代（109人、40.1%）であり、30代（69人、25.4%）、50代（55人、20.2%）と続く。なお、対象者の平均年齢は47.08歳であった。

「雇用形態」は、正規職員が211人（77.6%）、非正規職員が61人（22.4%）であった。なお、非正規職員には、契約社員や登録ヘルパーなど、正規職員以外の者すべてが含まれている。

「回答者が障害福祉サービスに従事した年数」は、10年以上従事している者が141人（51.8%）であり、5年以上10年未満の者が63人（23.2%）となっている。さらに、「所有資格」については、介護福祉士（159人）やホームヘルパー2級（138人）などの介護系資格を取得している者が

多い。また、資格なしで従事している者は34人であった。なお、複数の資格を取得している者の合計が回答者総数よりも多くなっているのは、複数回答にしているためである。さらに、最終学歴については、福祉系高等学校・専門学校・大学・大学院を卒業または修了した者を「福祉系」、それ以外の者を「非福祉系」としたところ、「福祉系」が42人（15.4%）、「非福祉系」が230人（84.6%）であった。

(2) 福祉体験学習の有無

中学校で福祉体験学習を行ったかどうかを表2に示す。「はい」と回答した者が24人（8.8%）、「いいえ」と回答した者が215人（79.1%）となっている。また、年代別と福祉体験学習の有無をクロス集計した結

表1 回答者の基本属性

項目	カテゴリー	N	%
性別	男性	149	54.8
	女性	121	44.5
	回答しない	2	0.7
年齢	10代	1	0.4
	20代	9	3.3
	30代	69	25.4
	40代	109	40.1
	50代	55	20.2
	60代	25	9.2
	70代	4	1.5
雇用形態	正規職員	211	77.6
	非正規職員	61	22.4
障害福祉サービスに従事した年数	1年未満	1	0.4
	1年以上3年未満	33	12.1
	3年以上5年未満	34	12.5
	5年以上10年未満	63	23.2
	10年以上	141	51.8
取得資格	介護福祉士	159	55.6
	ホームヘルパー2級	138	48.3
	介護支援専門員	51	17.8
	社会福祉士・精神保健福祉士	35	12.2
	資格なし	34	11.9
	介護福祉士実務者研修	31	10.8
	介護職員初任者研修	29	10.1
	保育士	21	7.3
	看護師・保健師・助産師	3	1
	介護アテンドサービス士	3	1
	PT・OT・ST	2	0.7
最終学歴	福祉系	42	15.4
	非福祉系	230	84.6

N=272

表2 中学校で福祉体験学習を行ったか

カテゴリー	N	%
はい	24	8.8
いいえ	215	79.1
覚えていない	33	12.1

果を表3に示す。また、福祉体験学習を行った者の割合（以下「実施率」）を年代別で算出した結果、20代・30代の実施率がそれぞれ44.4%、15.9%となった。

表3 年代/福祉体験学習の有無と実施率

	はい	いいえ	覚えていない	実施率(%)
10代	0	1	0	0
20代	4	2	3	44.4
30代	11	44	14	15.9
40代	4	95	10	3.7
50代	4	47	4	7.3
60代	1	22	2	4.0
70代	0	4	0	0.0

(3) 障害福祉サービスに従事したきっかけ

障害福祉サービスに従事したきっかけについて、「育児・介護休業からの再就職（以下「再就職」）」「介護以外の業界からの転職（以下「介護以外転職」）」「高齢者介護からの転職（以下「高齢者介護転職」）」「卒業後、すぐ障害福祉サービスに従事（以下「卒業後就職」）」に分類した結果を表4に示す。介護以外転職が100人（36.8%）、高齢者介護転職46人（16.9%）となっている。

(4) 障害福祉サービスに従事したきっかけに関する自由記述

障害福祉サービスに従事したきっかけの自由記述について、KHCoderを用いて、頻出150語と共起ネットワークを抽出した。障害福祉サービスに従事したきっかけごとに、回答者数、総抽出語数⁴⁾及び異なり語数⁵⁾を表5にまとめた。

表5 分析に使用した総抽出語数及び異なり語数

	介護以外転職	卒業後就職	高齢者介護転職
回答者数	100	44	46
総抽出語数(使用)	1,477(634)	619(247)	635(295)
異なり語数(使用)	393(288)	209(140)	236(169)

また、共起ネットワークを抽出する際は、最小出現数を4にし、コーディングする際のキーワードを明確にするため、分析対象語を名詞（固有名詞含む）に限定することとした。共起ネットワークとは、テキストの中で用いられた語と語の関係性を示した結びつきであり、回答者の自由記述の中で用いられている単語間の関係を意味している。ある単語が出現するところの単語が出現する可能性が高いということであり、かつ出現語数が多いと、一般化させることが可能であると考えられる。

きっかけごとに表6～8、図2～4に示す。なお、再就職については回答者数が少ないため、分析の対象外とした。また、自由記述の表現については、恣意性を最大限排除し、分析の正確性を保つため、明らかに同一の意味であると考えられる「障害」と「障がい」を「障害」にまとめる以外の操作はせず、原文のまま引用することとしている。

①介護以外転職

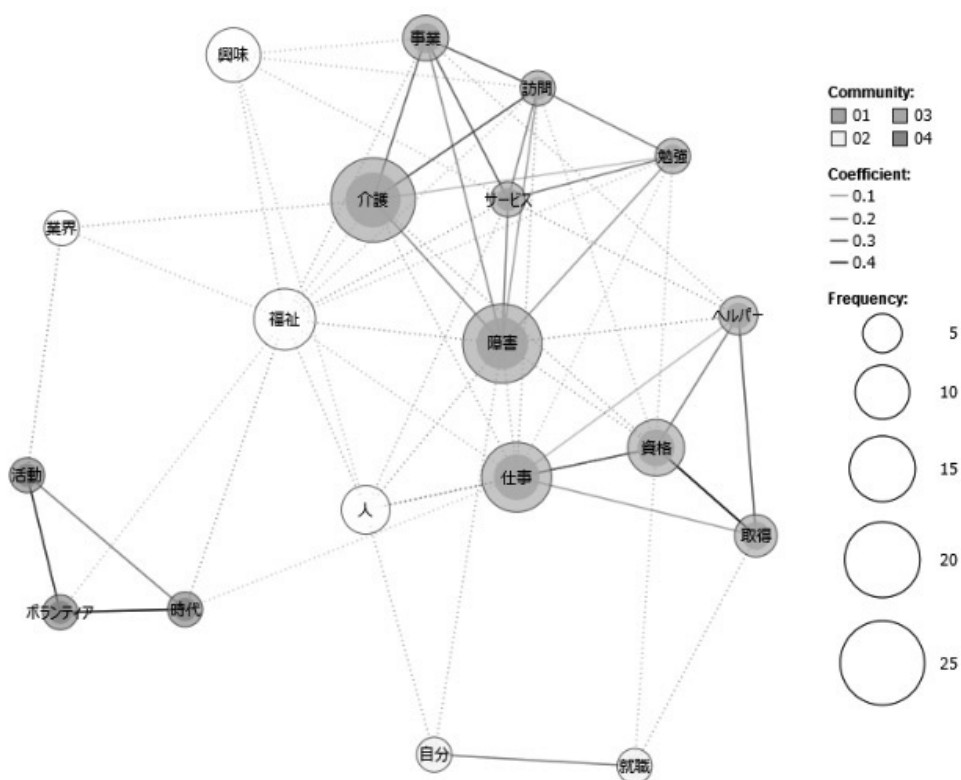


図2 介護以外転職の共起ネットワーク

表6 介護以外転職 自由記述頻出 150 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
介護	25	携わる	2	ハローワーク	1
障害	22	経験	2	バンド	1
仕事	17	見る	2	安定	1
福祉	13	元々	2	依頼	1
資格	11	向く	2	異動	1
興味	10	好き	2	医療	1
思う	8	始める	2	一般	1
持つ	8	子供	2	云う	1
人	8	事務	2	運営	1
事業	7	事務職	2	営業	1
関わる	6	受ける	2	営利	1
取得	6	需要	2	加入	1
ヘルパー	5	就く	2	可能	1
現在	5	従事	2	介助	1
サービス	4	出来る	2	壊す	1
ボランティア	4	紹介	2	開業	1
活動	4	状態	2	開設	1
感じる	4	職	2	掛け持ち	1
業界	4	職員	2	且つ	1
考える	4	職種	2	勧め	1
時代	4	身内	2	勧誘	1
自分	4	昔	2	感銘	1
就職	4	接する	2	管理	1
知人	4	祖父	2	簡単	1
働く	4	多い	2	企業	1
勉強	4	知的	2	機	1
訪問	4	当時	2	機械	1
応募	3	働ける	2	気	1
会社	3	憧れる	2	疑問	1
看護	3	発達	2	給与	1
関係	3	必要	2	居る	1
高齢	3	副業	2	共感	1
参加	3	保険	2	共通	1
施設	3	募集	2	教える	1
時間	3	母親	2	勤める	1
職場	3	法人	2	勤務	1
親	3	魅力	2	近所	1
進む	3	目指す	2	偶	1
制度	3	役に立つ	2	経緯	1
前	3	老人	2	経済	1
転職	3	お手伝い	1	継続	1
誘う	3	はじめ	1	軽い	1
センター	2	ガイド	1	決める	1
デイサービス	2	コア	1	結婚	1
以前	2	ススめ	1	研修	1
縁	2	セラピー	1	見つかる	1
学生	2	チラシ	1	見つける	1
起業	2	ディ	1	固定	1
求人	2	デイ	1	甲斐	1
空く	2	ハード	1	行政	1

②卒業後就職

表 7 卒業後就職 自由記述頻出 150 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
障害	19	携わる	1	提供	1
福祉	9	経験	1	当事者	1
楽しい	5	継続	1	当時	1
仕事	5	繋ぎ	1	特に	1
アルバイト	4	決める	1	内定	1
ボランティア	4	決定	1	日中	1
在学	4	見通し	1	悩み	1
思う	4	元々	1	必要	1
実習	4	交流	1	別	1
大学	4	考える	1	偏見	1
学ぶ	3	行う	1	保険	1
学生	3	行く	1	方々	1
興味	3	高い	1	訪	1
支援	3	高齢	1	訪れる	1
資格	3	今後	1	魅力	1
時代	3	困る	1	明日	1
自分	3	差別	1	問題	1
就く	3	子ども	1	役立つ	1
弟	3	死ぬ	1	友人	1
ヘルパー	2	事業	1	友達	1
介護	2	持つ	1	誘う	1
学校	2	社会	1	養護	1
関係	2	惹く	1	療育	1
高校	2	取る	1		
施設	2	取得	1		
自閉症	2	出合う	1		
紹介	2	純粹	1		
職	2	助け合う	1		
分野	2	将来	1		
OT	1	少ない	1		
アップ	1	職業	1		
グループホ	1	職種	1		
サービス	1	身近	1		
スキル	1	身体	1		
バイト	1	進路	1		
意思	1	人	1		
意識	1	生かす	1		
一時	1	生きる	1		
汚れ	1	生活	1		
家族	1	接する	1		
我が身	1	専門	1		
会社	1	疎通	1		
楽しむ	1	足りる	1		
活かす	1	他	1		
活動	1	耐える	1		
関わり	1	短大	1		
関わる	1	知り合う	1		
希望	1	知る	1		
勤務	1	知的	1		
兄弟	1	直面	1		

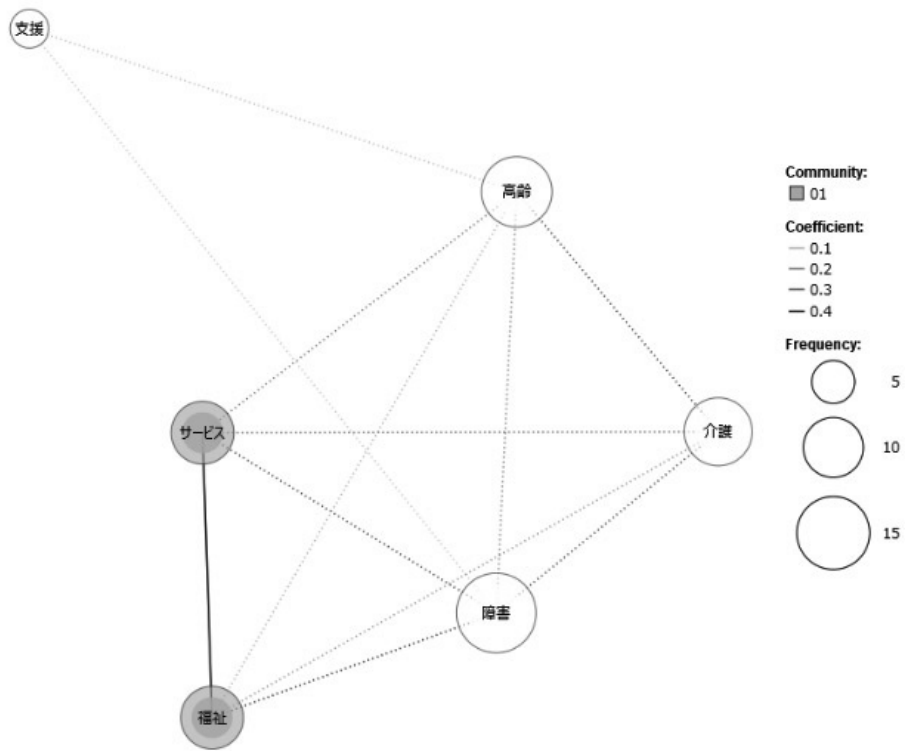


図3 卒業後就職の共起ネットワーク

③高齢者介護転職

表 8 高齢者介護転職 自由記述頻出 150 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
障害	18	換え	1	新規	1
高齢	14	管理	1	身体	1
介護	13	観る	1	人間	1
サービス	11	関わり	1	人間味	1
福祉	11	関わる	1	人生	1
支援	4	関係	1	制度	1
ヘルパー	3	希望	1	成長	1
感じる	3	給料	1	専門	1
経験	3	居宅	1	待遇	1
仕事	3	共生	1	探す	1
施設	3	兄弟	1	知り合い	1
特に	3	継続	1	知る	1
年	3	健常	1	知識	1
訪問	3	堅い	1	知人	1
デイ	2	研修	1	知的	1
意識	2	現在	1	丁度	1
違い	2	現状	1	長期	1
開始	2	向き合える	1	低い	1
興味	2	向ける	1	当事者	1
再び	2	行う	1	働く	1
資格	2	行く	1	得る	1
事業	2	行なう	1	特	1
受ける	2	合う	1	入所	1
従事	2	合わせる	1	配属	1
地域	2	最後	1	配置	1
分野	2	在宅	1	必要	1
併用	2	思い	1	不自由	1
保険	2	思う	1	夫	1
法人	2	持つ	1	部署	1
友人	2	時代	1	聞く	1
利用	2	自身	1	方々	1
お誘い	1	自分	1	望む	1
かちかち	1	自由	1	本位	1
アップ	1	自立	1	本人	1
スキル	1	質	1	未来	1
ペース	1	実習	1	魅力	1
リハビリ	1	実績	1	無い	1
以前	1	実務	1	誘い	1
異動	1	社会	1	誘う	1
移動	1	惹く	1	養	1
一体	1	手助け	1	頼む	1
一対一	1	重度	1	理由	1
横行	1	出会う	1	離れる	1
価値	1	巡り合う	1	立つ	1
加える	1	紹介	1	両親	1
介助	1	上げ	1	両立	1
拡大	1	条件	1	労働	1
獲得	1	職員	1	老健	1
学生	1	職業	1	話	1
勧め	1	職場	1	騙す	1

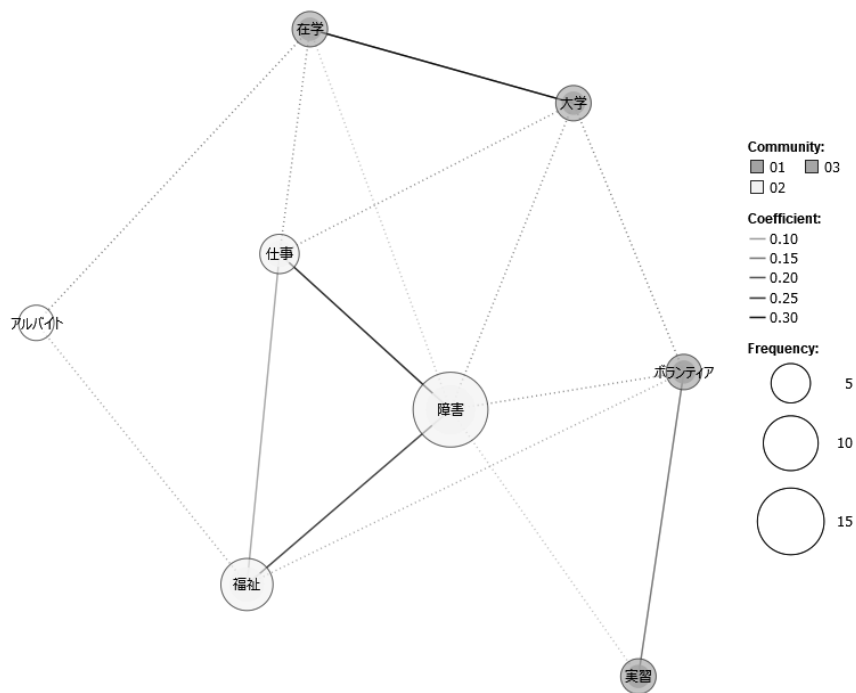


図4 高齢者介護転職の共起ネットワーク

(5) 共起ネットワークからのカテゴリ作成

共起ネットワークで分類された Community⁶⁾ごとに出現ワードをまとめたものが表8～表10である。介護以外転職では4つの Community に、卒業後就職では3つ、高齢者介護転職では1つの Community に分類することができた。

表8 Community の出現ワード（介護以外転職）

Community	出現ワード
1	「介護」「障害」「サービス」「勉強」「訪問」「事業」
2	「自分」「就職」
3	「仕事」「資格」「取得」「ヘルパー」
4	「活動」「ボランティア」「時代」

表9 Community の出現ワード（卒業後就職）

Community	出現ワード
1	「障害」「仕事」「福祉」
2	「ボランティア」「実習」
3	「在学」「大学」

表 10 Community の出現ワード（高齢者介護転職）

Community	出現ワード
1	「福祉」「サービス」

このうち、出現ワード2つでは客観的な分析ができないと判断し、出現ワードが3つ以上の Community を分析対象とすることとする。故に、表8「自分」「就職」、表9「在学」「大学」、表10「福祉」「サービス」は分析対象から省いた。よって、本研究における分析対象は、

- ①. 介護以外転職の Community1
- ②. 介護以外転職の Community3
- ③. 介護以外転職の Community4
- ④. 卒業後就職の Community1

の以上4つとする。

①介護以外転職 Community1

出現ワードは「介護」「障害」「サービス」「勉強」「訪問」「事業」であった。実際の自由記述回答は以下のようであった。（下線は筆者がつけたものである。）

- ・たまたま見つけたチラシで重度訪問介護の資格を勉強してみたいと思い、勉強したら介護の仕事をやりたいなくなった。
- ・介護事業を開業した為
- ・ヘルパー登録をした時に事業所がたまたま障害サービスをしていたから。
- ・介護保険制度が始まり資格をとり現在は高齢者介護と障害とふたつ掛け持ちしています。
- ・看護師を目指し挫折、十数年後に再度目指そうと考えたときに、現在は看護＝医療中心、昔の看護＝介護になってると聞いたので。又介護も障害福祉も本質的なところは同じと考えている。
- ・偶々、昔の会社の同僚が、障害者訪問介護事業所を開設して、それを見て、軽い興味から始めた
- ・元々は介護老人保健施設で勤務していたが、訪問介護事業所へ転職したため、障害福祉サービスにも関わる事になった。そのため、現在も高齢者介護、障害者介護どちらにも関わっている。
- ・事務職として就職したのが介護施設でそこで資格を取得し、人材不足の時には介護にも従事した
- ・実姉の介護を通じて参加
- ・親の勧めもあり、介護業界の需要が高まると思ったため

- ・親族に介護する者が居たので
- ・祖父の介護がきっかけ
- ・友人が頸椎損傷になり時折、ボランティアで介護をしていた経緯から、困っている方が多いことがわかり。
- ・どんなんだろ？と思って、放課後デイに就職したら、知的障害児さんや発達障害児さんの純粹さに惹かれてしまい、今日に至ります。接している内に、自分と共通する部分が多く、自分が発達障害と知りました。子ども達の生き辛さは、私が子供の頃から体験してきた事なので、理解し、共感できるので、支え続けたいと思っています。
- ・ヘルパーの資格を持っていたのでたまたま求人誌にあった障害者ヘルパーに応募した事から
- ・ヘルパー登録をした時に事業所がたまたま障害サービスをしていたから。
- ・視覚障害者が身内におられる方からガイドヘルパーと云う仕事が有ることを教えてもらい、何の資格も持っていなかったので資格取得をした。
- ・自分がそういう施設を運営したら、どのような障害者に対応できて、どんな人を世の中に送り出すことが出来るのか、みてみたくなったから。
- ・初任者研修をとり近所の社協の臨時老人デイサービスのつもりで応募したがあきが、地域活動支援センター（障害者デイ）しかなかったの なんとなく、、
- ・障害を持った親近者がいたから
- ・障害を持っている人と関わる仕事をしたかったから
- ・乗馬セラピーに携わるにあたって障害者福祉のことも勉強したかったため
- ・身内に障害者がいたので
- ・息子が障害を持っていたため
- ・知的障害のある娘の卒業後を考え、勉強会や講演会に参加した時に制度のありがたさに感銘を受けた。サービスを受ける側でもあるが、提供する側になりたいと思った。
- ・憧れるハードコアバンドの人たちが、障害福祉で働いていたので、そこへの憧れから。
- ・母親の友達に障害者がいたから

②介護以外転職 Community3

出現ワードは「仕事」「資格」「取得」「ヘルパー」であった。実際の自由記述回答には以下のようなものであった。(下線は筆者がつけたものである。)

- ・やり甲斐のある仕事、魅力的だと感じたから。
- ・営業の仕事が向いていなかったため
- ・機械関係ではなく人相手の仕事に就きたい
- ・子供が小学校になり、学生時代から福祉の仕事をやりたかったため

- ・視覚障害者が身内におられる方からガイドヘルパーと云う仕事が有ることを教えてもらい、何の資格も持っていなかったので資格取得をした。
- ・資格を取得したので身体を壊さない仕事に従事したかったため。
- ・障害を持っている人と関わる仕事がしたかったから
- ・人と関わる仕事がしたかった。人の役に立つ仕事。
- ・人と接する仕事をしてみたかったため。無資格でも就業可能な仕事に就きたかったため。
- ・他者の役に立ち、尚且つ仕事としても成り立つから
- ・当時不景気で仕事がなかったから
- ・福祉の仕事に興味があったため
- ・ヘルパー2級を取得したため。
- ・ヘルパーの資格を持っていたのでたまたま求人誌にあった障害者ヘルパーに応募した事から

③介護以外転職 Community4

出現ワードは「活動」「ボランティア」「時代」であった。実際の自由記述回答には以下のようであった。(下線は筆者がつけたものである。)

- ・ボランティア活動から
- ・学生時代からボランティア活動をしていた縁で。
- ・前職からの転職の際、高校生時代に1度だけの福祉ボランティアと大学時代に1度だけ自閉症の女の子と関わった経験からそちらに進みたいと思いました。
- ・友人が頸椎損傷になり時折、ボランティアで介護をしていた経緯から、困っている方が多いことがわかり。

④卒業後就職 Community1

出現ワードは「障害」「仕事」「福祉」であった。実際の自由記述回答には以下のようであった。(下線は筆者がつけたものである。)

- ・家族、友達に障害があったので元々障害福祉を希望してた。
- ・介護保険などは死に直面に耐え切れなく、障害福祉は将来性の高い職種だったから
- ・学生時代に障害のある方々に出会い、その魅力に惹きつけられたから
- ・兄弟に障害者がいたので
- ・子どもの頃から、身近に障害のある方と接することがあった為。
- ・障害者支援の仕事に就きたいと思っていたから
- ・障害当事者に誘われたから

- ・専門学校時代に障害者施設のボランティアに行き、そこで知り合った方の紹介で入職しました。「自分を必要としてもらえた」ということが、障害者福祉にかかわったきっかけです。
- ・他にできる仕事がなさそうだったから。障害者の社会生活の悩みは自分の問題でもあったから。
- ・大学の時にボランティアで障害者施設を訪れたのがきっかけ
- ・大学在学中に障害を持つ友人との関わりで障害者支援の仕事をする決めたから
- ・知的障害の方と関わるのが実習で楽しかったから！
- ・OTとして障害児の療育に携わりたかったから。

5 考察

自由記述回答の結果より、介護以外転職・卒業後就職に障害福祉サービスに従事するきっかけが何かを示唆するキーワード・キーセンテンスが抽出された。まずはそれぞれで導き出された Community について検討を加えていく。

介護以外転職 Community1 では、障害福祉サービスのみではなく、介護保険制度、すなわち高齢者介護も兼務している者も多く存在していることがわかる。介護保険制度における訪問介護事業所は全国で 36,564 件（厚生労働省 2018a）あるのに対し、障害者総合支援法における居宅介護事業所は 23,074 件（厚生労働省 2018b）である。介護保険の訪問介護事業を行いながら、障害福祉サービスの居宅介護事業を行っている事業者が多いと推察される。そうすると、就職先が「たまたま」障害福祉サービスを行っており、そのまま従事しているという者も少なくないと考えられる。また、身内に介護が必要な者がいるために障害福祉サービスに従事する者も一定数存在していることがわかった。

介護以外転職 Community3 では、障害福祉サービスに対して「魅力」「やりがい」を感じ、「人相手の仕事がしたい」という者も存在する。「人の役に立つ仕事」として障害福祉サービスが認知され、さらに資格を取得することによって「福祉の仕事」に従事している者が存在することがわかった。福祉の仕事は一般的に給料が安いと言われているが、それにもかかわらず「福祉の仕事」を選択するということは、一定以上のモチベーションが必要であると考えられるわけであり、金銭的対価以上の魅力があることが示唆されていると考えてもよいだろう。

介護以外転職 Community4 については、「学生時代のボランティア活動」が障害福祉サービスに従事するきっかけとなった層である。福祉体験学習は学校教育の一環として行われるものに対して、ボランティア活動は完全に自主性に委ねられる部分がある。半ば強制的に実施される形式だけのボランティア活動ほど苦痛なものはないだろう。福祉体験学習は、学校教

育に位置づけられつつも、生徒や学生の自主性を重んじるような学習であるべきだということが言えそうだ。藤原（2002）は、学校における福祉教育で、福祉やボランティア活動に関する学習プログラムが活発になっていることについて述べており、「児童・生徒が社会的な経験を通して生活問題を抱えている人の存在や援助のあり方については評価」している。福祉体験だけではなく、児童生徒期における体験は将来に少なからずとも影響を与える。しかし、問題点としては、「実践的な活動を展開する福祉教育は、人権意識の検証や社会問題解決のための学習要素が入りにくい」という点を示唆している。福祉体験学習が単なる「車いす体験」「アイマスク体験」に終始していることで、それについては意味がない、すなわち、当事者体験だけの福祉体験学習は意味がないといえる。

卒業後就職 Community1 については、介護以外転職と重複する部分が多く見られる。「身内に障害者がいる」「学生時代のボランティア活動」などがきっかけになっている者が多い。「身内に障害者」がいるため、「障害福祉に従事することを決めた」り、「学生時代のボランティア活動」が「障害福祉に従事することを決めた」のであれば、卒業の際、他の職種に振り向くことなく障害福祉サービスを選択するというとても強い動機となり得る。しかしながら、「身内に障害者がいる」という者はそう多くないわけであり、そうなる学校教育において障害者とふれ合うなどという経験は、強い動機付けとなりうる可能性がある。藤沢（2012）は、高校生に対する調査により、介護に関する職場体験がある生徒の方が、介護職希望者の割合が高かったという。「実際の介護現場での出会いや介護体験が、感動や『人の役に立つ』という喜びを生む経験となり、介護職希望への動機づけとなる」（藤沢,2002）とも述べている。児童生徒期における福祉体験は、介護職に従事する、しないに関わらず、職業選択においては重要となる。よって適切な福祉体験学習は障害福祉サービスの人材不足解消の一助になり得るのではないだろうか。

以上より、このような結論が導き出された。

1. 介護職以外から転職してきた者には、①転職してきた事業者が障害福祉サービスを行っていた。②福祉の仕事に魅力を感じて転職してきた。③学生時代のボランティア活動が契機となり転職してきた者が存在する。
2. 学校を卒業して障害福祉サービスに従事した者には、①身内が介護を必要としていた。②学生時代のボランティア活動が契機となって障害福祉サービスに従事した者が存在する。
3. 高齢者介護から転職してきた者や、一旦介護職から離れて再就職してきた者については、明らかな動機は見いだせなかった。

6 おわりに

おわりに、本研究の限界と今後の課題について示しておく。本研究においては、介護以外転職・卒業後就職・高齢者介護転職・再就職の4つのターニングポイントについてそれぞれきっかけを調査するものであった。介護以外転職・卒業後就職グループにおいては一定のキーワード・キーセンテンスを見いだすことができたが、再就職の回答人数が少なく調査対象外となった。また、高齢者介護転職については有意であると考えられる Community が出現せず、同じく調査対象外となった。また、中学校における福祉体験学習との関連については経験者が少数であったため、分析を行うことができなかった。今回は障害福祉サービスのうち、重度訪問介護事業所のみを対象としたため、調査対象者数が少なくなったため、次回調査では、それ以外の障害福祉サービスについても調査対象を広げたいと考えている。

(文献および資料)

- 藤沢緑子 (2012) 「介護の仕事に対する高校生の意識」『日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要』 17, 23 - 32.
- 藤原里佐 (2002) 「「福祉教育」と「福祉専門職」—介護福祉専攻の学生にみる志望動機とその背景」『帯広大谷短期大学紀要』 39, 91 - 98.
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』 ナカニシヤ出版, 2014
- 今井訓子 (2011) 「介護職離職の構造に関する研究：介護福祉士養成校卒業生の追跡調査から」『植草学園短期大学紀要』 12, 1 - 12, 2011
- 神谷健一 (2010) 「Google ドキュメントによるアンケートフォームと短縮URL: 簡易オンライン出席カード / 質問カードの作成」『e-learning 教育研究』 5, 31 - 34.
- 介護労働安定センター (2019) 「平成 30 年度介護労働実態調査結果について」
(http://www.kaigo-center.or.jp/report/2019_chousa_01.html, 2019. 11. 13)
- 厚生労働省 (2019) 「平成 29 年度介護サービス施設・事業所調査の概況」
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service17/dl/gaikyo.pdf>, 2019. 11. 13)
- 厚生労働省 (2019) 「平成 29 年度社会福祉施設等の調査の概況」
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/17/dl/gaikyo.pdf>, 2019. 11. 13)
- 倉田敬子・松林麻実子・武田将希 (2017) 「日本の大学・研究機関における研究データの管理、保管、公開—質問紙調査に基づく現状報告—」『情報管理』 60 (2), 119 - 127.
- 馬淵敦士 (2018) 「介護職を職業としての選択肢に押し上げる要因に関する考察：小中学校における福祉体験学習の影響に焦点を当てて」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』 31, 92 - 103, 2018
- 三浦麻子・小林哲郎 (2016) 「オンライン調査における努力の最小限化 (Satisfice) 傾向の比較：IMC 違反率を指標として」『メディア・情報・コミュニケーション研究』 1, pp. 27 - 42.
- 岡多枝子 (2014) 「青年期に『ふくし・ケア』を学ぶ—福祉系高大連携によるアクティブラーニング」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』 27, 13 - 20, 2016.

岡多枝子・大浦明美・奥山留美子 (2016) 「青年期における福祉の学び—高大連携—」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』27, 6-12, 2016

(注)

- 1) 日本の超高齢社会の特徴『健康長寿ネット』公益財団法人長寿科学振興財団
<https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/tyojyu-shakai/nihon.html>
- 2) 介護労働安定センターの調査による「不足感」は、「大いに不足」・「不足」・「やや不足」と答えた者の合計割合である。
- 3) 「強い努力の最小化」については、三浦が <https://psych.or.jp/publication/world082/pw09/> (2019.11.11) で詳細に解説をしているが、「質問紙に対して適当に選択肢を選んでしまう」ことを指す。
- 4) 自由記述回答において出てきた単語の総数。
- 5) 総抽出語数より重複した単語を削除した数。
- 6) KHCoder では、比較的強くお互いに結びついている部分をコミュニティ (Community) と表している。

